

キリストの光のキリスト

受難の主日(枝の主日) 4月5日 (世界青年の日)

(マルコ15・1—39 または14・1~15・47)

違った神の像を作り上げてい
るのではないか。

毎年、受難の主日(枝の主日)

と聖金曜日に、主イエス・キリス
トの受難が朗読される。語り手、
群衆、他の登場人物の読み手
を決める。司式司祭はキリスト
の役。その言葉は少ない。

キリストの役をしながら考え
た。どこが違う…。

受難物語が淡々と読み進めら
れる。キリスト役のわたしはき
れいな祭服を身にまとい、祭壇
の中央に立つ。受難物語が読
まれる言葉を聞きながら情景を
思い浮かべる。明るい光に照ら
されて立つ自分がだんだんと惨
めになる。キリストはこんな姿
ではない。

地べたから

受難の主日の典礼は、主のエ
ルサレム入城を記念して、枝
の行列で始まる。人々から歓迎
されるイエス。間違ったメシア
(キリスト)像をもった人々に歓
迎されるイエス。そのイエスは
受難に向かつて進む。

聖金曜日にも受難物語が読ま
れる。受難の主日と同じように。
典礼全体が主の受難を表す。だ
から、通常行われている福音
朗読後の説教は省略すること
ができる。必要であれば短い説
教をしてもよいと儀式書に記さ
れている。

本当のキリストの姿はどのよ
うなものだったのか。勝手に救
い主の像を作り上げるのではな
く、使徒たちが命を懸けて伝え

たキリストの姿を忠実に追
わなければならぬ。説明は
いらぬ。

しかし、ある年の聖金曜日。
受難の朗読を聞きながら心の



奥底で深い衝動にかられた。
朗読が終わって…祭壇を降り
：聖堂の床に伏した。祭服を
来たまま…床に伏して…その
まま話した。キリストはこう

した。地べたに張り付いた。だ
から、どんな人とも視線を同
じにして、手をその人に回し、
その人の目を見つめ、抱きし
めて言うことができる。きつ
いね。あなたの苦しみは分か
るよ、と。ここに救いがある。
だから、父である神はイエ
スを「引き上げる」。だから、
わたしたちも「引き上げられ
る」。ここに救いがある。
イザヤ書に記された苦しむ
しもべの姿。フィリピの教
会にあてて書かれたパウロの
手紙。まことのキリストの姿
がこのようなものであったか
らこそ、わたしたちは「イエ
ス・キリストは主である」と宣
言することができる。だから

こそ、父である神をたたえる
ことができる。マルコ福音書
の受難物語は記している。
百人隊長（異邦人）はイエス
がこのように息を引き取られ
たのを見て言った。「本当に、
この人は神の子だった」と。
人も教会も地べたに伏さな
ければほんとうのキリストは
見えない。

（山元眞＝福岡教区司祭／カット＝高崎紀子）

今週の福音

- 6日・月ヨハネ 12・1―11
- 7日・火ヨハネ 13・21―33、36―38
- 8日・水マタイ 26・14―25
- 9日・木ヨハネ 13・1―15
- 10日・金ヨハネ 18・1―19、42
- 11日・土マルコ 16・1―7（復活徹夜祭）